

## ラオスの舟競漕

## — アルシャンボーの分析を通して —

## Boatrace in Laos : Through Analyses by Archaimbault

橋本 彩 (Sayaka Hashimoto) 指導：寒川 恒夫教授

本研究は、ラオスの舟競漕を調査するにあたり、先行研究であるシャルル・アルシャンボーの論文「ラオスにおける舟競漕：文化複合」（1972年出版）を分析し、彼が約50年前に提示した舟競漕の分析を再検討するものである。

アルシャンボーは論文の中で、1951年から1955年に行われたラオス各地の調査をもとに、ラオスの南部（チャンパサック）、中部（ヴィエンチャン）、北部（ルアンパバーン）の舟競漕儀礼について比較研究している。

まず、この3カ所に共通した分析は、土地の守護霊であるナーガと舟の結びつきである。水と深く結びつくナーガは、川の水を司る精霊と考えられており、季節の変わり目にナーガが循環することによって、稲作に適した水量が確保されえると分析している。特に雨期明けの際には、その排水機能を助けるため、支流から本流メコン河へ向けて舟競漕を行うことで、ナーガの進行を促し、川の水量を下げ、コントロールしているという。

次に、かつて王国が栄えていた地域においては、現在消失してしまった舟競漕儀礼があり、それを各地の年代記、土地の人々の記憶をたどりながら再構築してみると、そこには王国の支配権や王の権威の確立をめざす諸機能が複合して存在していたと分析している。アルシャンボーは、特に南部チャンパサックにおいて詳細な調査報告を行っており、かつてのチャンパサック王国の子孫であるブン・ウム公の聞き書きを交え、舟競漕儀礼から読みとれる王国のヒエラルキーを描き出している。

この2番目の分析が、本研究で問題とする分析概念である。なぜなら、筆者が現在調査する舟競漕とアルシャンボーが調査を行った50年前の舟競漕との間に「王制廃止」の歴史が存在するからである。50年の間、ラオスは歴史的出来事の連続であった。フランス植民地からの独立運動に始まり、国内の政権対立、国王を中心とする王国政府の廃止、現在の社会主義政権樹立などが主たる変化である。

アルシャンボーの調査から50年後の舟競漕調査を行う当初の目的は、舟競漕の「50年の変容」を捉えようとしたものであったが、研究を進めていく段階で、「変容」の捉え方に疑問を感じはじめた。時代の流れで変容するものは、舟競漕に限らず、多くの現象にみることができる。しかし、舟競漕に限って言えば、資料の限界から、筆者が捉えよう

とする変容は、あくまでもアルシャンボーが捉えた舟競漕の変容であって、彼が捉えなかった部分においては、「変容」と捉えられるのだろうか。

本研究では、アルシャンボーが捉えた舟競漕について、彼の調査分析方法、分析を基礎づける資料とインフォーマントの傾向、全体的な論文傾向、時代や学問の背景などを交えながら、評価批判を加え、再検討を試みたものである。

彼の調査分析法においては、師であるアンドレ・ルロワ＝グーランとジョルジュ・セデスの影響が大きかったものと思われる。また、ルロワ＝グーランの師でもあるマルセル・モースの影響が随所にみられ、モースの「完全でなければ具体性は生まれない」という言葉を支持し、各地で行われる儀礼の詳細を正確に捉え、誠実さをもって民族誌の記述をおこなっていた姿勢がうかがえる。加えて、調査対象となる地域の歴史を調べると共に、地域の口承伝承や伝説、説話を収集し、分析材料とする方法は、ルロワ＝グーラン、セデスの影響を受けたものと推測される。歴史を重視したアルシャンボーの視点は、当時本国フランスで構造主義が隆盛であったのに対し、構造主義とは一線を画していたと評価を受けている。

こうした背景のもとに発表されたアルシャンボーの舟競漕論文は、彼の生涯にわたる出版論文の中でも比較的后期にあたるもので、最大の特徴は、彼が構想していた比較研究を実現させたことである。ラオス国内の比較研究、そしてラオスの舟競漕に関する貴重な資料として、その論文は価値あるものと大方のラオス研究者、または舟競漕儀礼の研究者は評価をしている。

一方、書評を行ったエヴェレーヌ・ポレ＝マスペロ（1974）と山本達郎（1976）は、当時の舟競漕を支えていた漕ぎ手と舟に関する説明がなされていないことを指摘している。これらの視点が扱われていないことにより、どのような重要性が欠落しているのかを両者共に明らかにしていないが、アルシャンボーと筆者の間にある50年の歳月をつなぎ、現在まで舟競漕を伝えているのは、漕ぎ手と舟である。今後の展望として、扱われなかった漕ぎ手を中心に調査をおこなうことで、アルシャンボーが分析した後の変容を捉えつつ、新たな視点から現在の舟競漕が描かれると考えられる。